



松江大橋の人柱

はじめに

島根県の松江は、城下町から発展した山陰の大都市ですが、宍道湖から中海にそそぐ大橋川が市街地を南北に分断しているのです。この川に架かる四つの橋が、町をつなぐ重要な役割を果たしています。なかでも松江大橋は、慶長13年（1608）から大正3年（1914）に新しい橋が架けられるまでの300年もの間、唯一の橋として町を支えてきました。

現在の松江大橋は、昭和12年（1937）に完成した17代目の橋ですが、この建設工事の際に大変痛ましい事故が起きてしまいました。そして、それは松江大橋に古くから伝わる人柱を埋めた場所と同じだったと語られています。

今回は、松江大橋の事例によって因縁話が成り立つさまを見るとともに、人柱伝説がどのようにして生れたのかを考えていきたいと思います。



松江大橋 手前が事故現場となった第一号橋脚（島根県松江市）

源助柱

さて、松江大橋の人柱伝説を世に広めたのは、あの小泉八雲でした。明治23年（1890）に英語教師として松江に赴任した彼は、現地で聞いた人柱伝説を『神々の国の首都』に記したのです。その大略は次のよう

りも100mほど東に架けられていたと考えられており、架橋の位置自体が違う可能性があることも言い添えたいと思います。

源助が埋められた場所の変化

ちなみに、事故以前の文献をいくつか見ると、源助が埋められた場所は小泉八雲の記述を引用して「中央」か、もしくは「記されていない」かのどちらかに対して、事故後は「第一号橋脚と同じ位置」または「南から三番目の橋脚」と書かれたものが目立つようになり、南から三番目というのは、現在の橋では第二号橋脚を指しますが、この橋脚には、事故後の記念事業として深田氏の面影を写した銅版レリーフが埋められたことから、生じたのかもしれない。

このように事故後は、深田氏の事故と源助が人柱にされた位置が関連付けられる傾向にあるのです。

源助とは？

そもそも、源助柱の伝説はどのようにに生れたのでしょうか。この橋の架け替え工事で多くの人が亡くなったから人柱伝説が生れたという説もありますが、では、なぜ「源助」なのでしょう。もしかすると「源助」には人名以外の別の意味があるのかもしれない。

うになります。

「慶長年間に堀尾吉晴が、最初に橋を架けようとしたとき、橋脚を支えるしつかりした土台を造ろうとしたが、流されたり丸ごと呑み込まれたりした。それでもようやく橋は出来あがったが、上げ潮に押し流され、修復しても、その度に壊されてしまった。そこで人柱を立てることになった。中央の橋脚の下、水勢が最も欲しいままに働く川床に源助という雑賀町に住んでいた男が埋められた。襦のついていない袴をはいて橋を最初に渡った男が橋の下に埋められるとあらかじめ決められていたから、彼が犠牲になったというわけである。そのために橋の中央の橋脚は三百年間彼の名前をとって源助柱と呼ばれてきた」

深田清技師の殉職

次に昭和に起きた事故について説明します。昭和10年（1935）に

例えば、有名な岩国の錦帯橋も『岩邑若干集』に「此橋はむかしは源介橋とて、柱橋なりけるを・・・」とあり、現在の形になる前には、「源介橋」と呼ばれていたことがわかります。

“なかだち”をする

松江大橋と錦帯橋は、いずれも武家町と町人町をつなぐ、一国で唯一の大動脈でした。そして、「源介」の「介」という字には、「なかだちをする」または「くぎる」という意味があります。つまり「源介」は、かつて「源である」町のなかだちをする」もしくは、「源である」町をくぎる」などという意味の一般名称であり、それが松江大橋では字面か



深田氏殉職前日の記念写真 後列左端の帽子を持った人物が深田氏。その右隣の腰に手を当てている人物が河戸万吉氏。（『土木建築工事画報』昭和12年1月号より転載）

着工した現在の松江大橋は、橋長134m、幅員12mの橋体を、4基の鉄筋コンクリート橋脚で支える鋼ゲルバー桁橋です。この工事を担当した島根県土木道路技師の深田清氏は、橋脚の基礎となる鉄筋コンクリート製の井筒の中で不慮の事故に遭いました。

最も北側の第一号橋脚基礎の井筒沈下作業が終り、内部へのコンクリート打設工事を監督するため、水面下17mの井筒底部にて作業中、突然落下したコンクリート運搬用のパケットが頭部を直撃したのです。昭和11年9月12日早朝のことでした。こうして深田氏は30歳という若さで非業の死を遂げたのです。

当日の夕刊

事故当日の夕刊には、さっそく「源助柱の伝説と同一の場所」という見出しで次のように書かれています。「松江大橋の架橋工事に絡む源助柱

ら「源助」という人名に転訛し、人柱伝説が生れたのかもしれない。もっとも錦帯橋については、寛永年間に「河上源助」という者が橋に關する布令を連名で出しているのので、こうした管理者の名前を単純につけたのかもしれないが、一見して人名由来に見える名称でも、別の意味がある可能性を考える必要もあるかと思うのです。

おわりに

最後に深田氏の事故にまつわる不思議な話を紹介したいと思います。深田氏は事故に遭う前日、事故現場とまったく同じ場所で記念撮影をしていたのです。一緒に写真に写った同僚の河戸万吉氏は「遭難場所は奇しくも昨日記念撮影をした第一号橋脚の西側の一画」と具体的に記し、他の関係者も同様のことを述べているので、これは確かな話だと考えてもよいでしょう。

撮影時、深田氏がカメラマンに向かって「君源助にならなにかね」などと冗談を言って笑っていたそうで、まさか自分がその翌日に事故に遭い、後に「昭和の人柱」などと呼ばれることになろうとは、この時は夢にも思っていなかったでしょう。単なる偶然かもしれませんが、私などは橋脚の位置云々よりも、よほど何かの因縁を感じるのです。

（文：江口知秀）



源助柱記念碑(左)と深田技師殉職記念碑(右)